

第五回留学報告書

白川亮

マサチューセッツ工科大学

こんにちは、マサチューセッツ工科大学経済学部白川亮です。毎回書いている気がするのですが、気がつけば二年目が終わっていました。本当に「気がつけば」という感じなので仕方ありません。

1. 個人的な話

日本は好きなのですが、二年生特有のカリキュラムの都合でこの冬は日本に帰れませんでした。大変残念でしたので、代わりにニューヨークに遊びに行きました。アメリカは辛いなと思いつながりながら研究していましたが、研究のことは一切忘れて遊びに行くと結構楽しくて、有名な観光スポットを見に行ったり有名なショーを見に行ったり、いろいろなグッズを買ったりして結構お金を使いました。アメリカというより、そこでの研究活動が辛いのかもしれません。

ボストンのバスケットボールコミュニティには今学期も参加できませんでした。学期初めは前回の報告書にある通り結構やる気があったのですが寒すぎて行けず、しかし最近だと気温も中々快適になってきましたが、まあ前回行かなかったし今回もいいかみたいなことを繰り返す感じになってしまいました。中学生の時に部活を辞めかけたときもこのように練習をサボるようになったので、当時を思い出します。次学期は積極的に頑張ります。

2. 授業の話

今学期はゲーム理論の授業を聴講しました。ゲーム理論は好きですが、その授業内容が自分の関心には合っていないので去年は履修しなかったのです。ですが複数の先生や同期、先輩達に「経済理論を専門にしたいならゲーム理論を履修しなさい」と一年間言われ続けたので、仕方なく単位は取らずに聴講だけすることにしました。つまらないものだと思って授業に出るとつまらないに決まっているので、何か研究に使えることはないか考えながら参加しましたが、そうすると、その時間を割いた価値はあったという程度に学びがあったかと思います。

3. 研究の話

日本で大学院生をやっていた時には、研究発表をしても今後の改訂作業にあたり重要なフィードバックをもらえる確率はほぼゼロと予想して、その仮定の下では割に合わないので発表をしませんでしたが、最近考えが（恐らく正しい方向に）変わり、発表の機会を増やすことにしま

した。第一に発表慣れしないといけない気がしてきたのと、第二に、無名の学生がオンラインで論文を公開しても、よほど自分の研究に関係していない限り一切読む気にはならないであろうと予想して、自分と自分の研究の宣伝のために発表しようかなという感じです。かなり素晴らしいコメントをくれる人もいて、そうでなくても間接的に考えるきっかけになるようなコメントが多いことも経験的にわかってきました。

今学期に「The Design and Price of Certification」というタイトルの論文を公開できました。例えば TOEFL のような外部の試験や、商品の売り手が外部の機関から貰える品質証明書等が単に収入最大化を目的にデザインされている場合の帰結を調べています。技術的には、学生の能力や財の品質に関してどのくらいの情報を明かす試験を設計すべきかと言う情報設計の側面と、何種類の試験をどのような価格で売ると収入が大きくなるかと言うメカニズムデザインの側面、それから、どのような試験が実際に購入されたかという意味決定自体が導くシグナリングの側面を同時に考えることになります。共著者のうち一人は去年 MIT に来ていた他大学の学生で、現実にモチベートされた形で研究トピックを見つけてくれました。今でも Zoom 越しに連絡を取り続けていて、新たな素晴らしい共同研究者に巡り会えて嬉しいです。

何度も報告している修士論文「Simple Manipulations in School Choice Mechanisms」はとうとう受理されました。前回ジャーナルに再提出したのが12月の頭で、年が明けてからすぐに返信が来ました。僕の改訂作業が遅かったのもありますが、初めに投稿してからここまでに二年かかっています。それまでも別の国際誌に二回リジェクトされているので、初めて論文を公にしてからだとここまで四年ほど経っていると思いますが、経済学界では恐らくスムーズに終わった方だと思います。それでも正直にいうと疲れましたし一旦かなり満足してしまいました。とはいえ研究トピックの決め方等で反省すべき点もありましたので、しばらくはこの論文よりも厳密に面白い論文を書きあげることを目標にします。

学部生の頃に始めた研究で続いていたのは残り「Stable Core Partitions in a Cartel Formation Game with Licensing」のみでした。それが前回の報告書を出した頃に Mathematical Social Sciences という雑誌から改訂要求をいただき、今学期に無事受理されました。この研究は提携形成ゲームと言う、どのように経済主体たちが提携を組むべきか、もしくは組んでいくかを分析する手法を、外部に関連技術の特許保有者（例えば研究機関）がいる（もしくはいない）寡占市場に応用したものです。特許保有者が市場の外部にいる場合には、寡占市場で色々な形のカルテルがある意味で維持されやすいことを主張していて、それからそのようなカルテルの具体的な形の全体が綺麗な形をしていることを証明しました。理科大の先生との共著で、この研究を通してどのように理論論文を書くのかを学ぶことができました。

■ 最後に

船井財団の皆様のサポートのおかげで二年目を無事に終えることができました。三年目以降もより刺激的な研究ができるよう頑張ります。